

メディアの機能に関する調査

飽戸 弘・西村 規子

1. 目的

メディアの機能を、テレビ、ラジオなど、メディアごとに見て行くのではなく、まず、「基本的欲求」を設定し、それらの欲求を、テレビが、ラジオが、インターネットが、どのように充足しているかを明らかにすることを目的とする。そのような考察の中で、メディアにおけるテレビの特徴・役割について、検討する。

2. 方法

カツラによる膨大な文献研究の結果、析出された、生活における35の基本的欲求から、その重要度によって、20の欲求項目を選び、調査を行った。調査対象は、2002年の予備調査では、幼稚園児（年少）120名、大学生413名。2003年から3年間の短期縦断調査では、小5（116名）→小6（105名）、中1（74名）→中2（60名）→中3（55名）となっている。調査で取り上げるメディアは、年齢別の変化を比較するため、すべての年齢の子どもに、テレビ、ビデオ、ラジオ、電話、テレビゲーム、会話、音楽、インターネットの8メディアとした。

3. 結果

予備調査、および、第1回調査（2002年）の結果から、幼稚園児、中学1年生、大学生で、生活における基本的欲求の充足パターンが非常に似通っていることが明らかになり、さらに、35項目の基本的欲求のうち20項目で、どの発達段階でもほぼカバーできることが分かった。よって、第2回調査（2003年）以降は、20項目の基本的欲求に絞って調査分析を行った。

まず、基本的欲求の重要度に関しては、年齢に応じて重要度の順位が入れ替わるなど、微妙な違いは見られるが、各世代に共通する欲求を充足するメディアの重要性・役割は、基本的に変化がないことがわかった。

これらの共通点に着目しつつ因子分析を行い、最終判定として20項目の生活における基本的欲求から「良識」「自己活性化」「人間関係」「環境監視」「現実逃避」の5因子が得られた。

それに対して、それぞれの対象年齢において、各メディアがどのような因子の充足に利用されているのかを明らかにしたところ、テレビは「環境監視」因子、会話は「自己活性化」因子に関して、ほぼ独占的に利用されており、「良識」因子に関しては、テレビと会話がほぼ同等に利用されていることが分かった。インターネットは、テレビや会話と併用で利用されることが多いメディアであるが、小6でテレビゲームに代わって初登場した後、中学生になると、次第に情報入手手段としてより強く意識される。一方、同様にテレビ・会話と併用される新聞は、中学生になると、インターネットに取って代わられる。また、音楽は、常に他のメディアと併用で利用されているが、中3時点のみ、「現実逃避」因子、「人間関係」因子の1項目において、急浮上することもわかった。

最後に、基本的欲求の5因子と、日頃よく見ているテレビ番組は、どの程度の関連が見られるものか、よく見る番組ごとに因子得点比較を行った結果、年齢ごとにそれほど大きな変化は見られないという結果を得た。

4. 結論

こうして、足かけ4年間の調査を経て得られた5因子15項目の基本的欲求充足度を、今後は、幼児対象の調査に生かすべく検討を続けていきたい。